

Title	『お気に召すまま』試論：愛の空間と帰還
Author(s)	山津, かおり
Citation	Osaka Literary Review. 23 P.51-P.62
Issue Date	1984-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25569
DOI	10.18910/25569
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『お気に召すまま』 試論

——愛の空間と帰還——

山 津 かおり

『お気に召すまま』には、宮廷対アーデンの森という伝統的対比構造がある。宮廷の中の争いの原因は、シェイクスピアの場合、特に、愛の秩序の崩壊にあるように描かれている。歪んだ愛の持ち主たちによって、宮廷から追放されるという憂き目にあうにもかかわらず愛を信じる人たちは、安らぎを求めてアーデンの森へ集まることになる。だが、このアーデンの森にも冬があり、羊飼いは貧しさに耐え、恋に悩んでいる。シェイクスピアはアーデンの森を完全な理想的牧歌世界として扱ってはいない。

シェイクスピアは、不運にめげることなく、父への愛、恋人への愛を大切に思うロザリンドを、道化的人物¹⁾として描くことによって、小鳥さえずり、人々の歌声の聞こえるアーデンの森という空間の中に、愛の空間という理想郷を創り上げ、更に宮廷への帰還を愛による帰還として描き上げている。この小論では、ロザリンドの道化性を考察しながら、どのように理想的な愛の空間が形成され、愛による帰還がなされているかについて考えてみたいと思う。

第一幕では兄弟が争い、愛の秩序が乱れている。その中で、弟のフレデリックに追放された公爵の娘でフレデリックの姪に当たるロザリンドは、たった一人の肉親である父のことを、まるで母親のように心配する。また、逆境の中にあっても、フレデリックの娘、ロザリンドの従妹のシーリアに対して、“Well, I will forget the condition of my estate, /to rejoice in yours.”²⁾ (I. ii. 15-6) といって、シーリアに妹に対するような愛を向けている。このようにロザリンドは、人間として基本となるような家族的な愛情を大切にする女性として描かれている。

また、公爵兄弟の争いに呼応するかのように争う、ロザリンドの父の旧友で、今は亡きサー・ローランド・デ・ボイズの息子たちのうち、末っ子のオーランドーは、彼の父親代わり、母親代わりとも言える老僕アダムを心から労る。意地の悪い長男オリバーの挑戦を受けて、力士のチャールズと勇敢に戦うオーランドーは、試合の会場で、ロザリンドに出会う。人を愛することを大切にするという共通点を持っているこの二人は、一目惚れして恋に陥る。愛の崩壊という悲劇的状况の中で、若い二人の恋が芽生えるわけであるが、ロザリンドは叔父に、オーランドーは兄に、それぞれ追放される。

二人の恋がきっと成就し、愛の秩序は、必ず回復するだろうと思わせる兆しはあるものの、第一幕の宮廷の場面は、悲劇的色彩が濃い。この状況を第二幕以降のアーデンの森での喜劇的なものに変化させるきっかけを作っているのが、ロザリンドとシーリアの次のような台詞である。

叔父に公領を奪われて、父と離れ離れになり、傷心のロザリンドは、シーリアと陽気な気分になるように遊びを工夫しようとする。

Ros. What shall be our sport then?

Cel. Let us sit and mock the good huswife

Fortune from her wheel, that her gifts may hence-
forth be bestow'd equally. (I. ii. 30-3)

不運に打ち勝つために二人が考え出した遊びとは、運命のおかみさんをからかって、不平等を許さないようにすることなのである。この二人の強気の姿勢は、劇の前半に生じている悲劇的な出来事を勢いよく、喜劇的なものに変化させていく原動力となっている。

David Young は、シーリアの台詞について、以下のように指摘している。

Celia's proposal to "mock the good housewife Fortune from her wheel," transforming the dread goddess to a spinning peasant, is a clear instance of reduction.³⁾

彼女の“the good housewife Fortune”という表現は確かに“reduction”の一例となっている。シーリアは恐ろしい運命の女神を、自分と同じレヴェルに格下げし、糸を紡ぐおかみさんにしている。そして、運命の女神も自分たちと大してかわらないと認識し、大笑いする。この大胆不敵さは、彼女可愛さに、ロザリンドを追放しようとする父親を置き去りにして、ロザリンドと旅に出るという行為にもよく現われている。

ロザリンドを助けたい一心で大胆になるシーリアは、劇の後半では、ロザリンドを陰ながら補助する役割を担っていると考えられるが、前半では積極的に心うつろなロザリンドに働きかけて、ロザリンドの特性、即ち、機知を生かして、真実なものを自分自身の力で探り、勝ち取ろうという性質を発揮させるようになっていく。シーリアの働きかけによって語り始めるロザリンドは、自然は運命の女神を負かすだけの知恵を身に付けさせようと、自分たちの所に“whetstone” (I. ii. 54) として役立つ道化を送ったにちがいないという話題にシーリアとの話を発展させる。

この話題はこの劇のテーマに関係するものである。運命の女神によって狂わされた運命を元に戻し、愛の秩序を回復するには、アーデンの森という自然の中に一時逃れ、道化タッチストーンを見習って、自然の与えてくれた知恵を磨き、愛の秩序を乱した運命の女神をからかえるほどの強い愛の絆を作り上げねばならない。この役割を担うのがロザリンドである。一見、劇的進展がないかのように思われる後半部で、彼女は一時的に、自らが陽気な愛を求める道化になることによって、愛の真実を突き止め、アーデンの森を寛容な愛に満ちた空間にすることになるのである。

ロザリンドには、卓越した批判精神と、普遍的なものを徹底的に追求しようとする精神⁴⁾ において、本職の道化の特性に相通ずるものがあるが、彼女はアーデンの森でオーランドーに再会し、深く恋に陥ることによって、狂人や道化と同じような支離滅裂ながら真実を含んだものを生み出す空白な精神状態を体験することになり、徐々に道化に近付いてゆく。

ロザリンドが道化に近付く最初のきっかけを与えたのは変装⁵⁾ である。彼

女が男装するのは、アーデンの森へ行くまでに遇うかもしれない危険から身を守るためである。けれども、この劇では男性の服装というものが、道化の斑服に相当していると考えられる。社会から浮いた存在の道化は、斑服を着て、天下御免の諷刺家となる。女性のロザリンドは、男性の服を身に付けてしまったことによって、女性でありながら男性に見られる。ところが、実際、男性ではないという属するところを失った存在となり、驚くべきほどの諷刺家となる。

アーデンの森へ行ったロザリンドが初めてタッチストーンに誉められる場面がある。それは森の木に掛けてあった、彼女自身に捧げられた恋愛詩に関して行われるタッチストーンとの機知問答の場面である。

Ros. Peace, you dull foll, I found them on a tree.

Touch. Truly, the tree yields bad fruit.

Ros. I'll graff it with you, and then I shall graff it with a medlar. Then it will be the earliest fruit i' th' country; for you'll be rotten ere you be half ripe, and that's the right virtue of the medlar. (III. ii. 115-20)

まだ、恋愛詩を書いた人が一目惚れの相手であるオーランドーとは知らないロザリンドは、“medlar”に“meddler”「お節介屋」という意味を掛けて、タッチストーンをからかっているが、道化のお節介な性質を、後に片思いの羊飼いのシルヴィアスと彼の恋人フィービーの恋に干渉することで発揮することになっている。

下手な恋愛詩が誰の筆になるのか知らない時には、機知を自由に働かせることができたロザリンドも、シーリアからオーランドーが書いたのだと聞かされると“Alas the day, what Shall I do with my doublet / and hose?” (III. ii. 219-20) と言って大慌てするが、彼女は変装を止めない。

陰に隠れて、オーランドーが憂鬱屋のジェイクィーズから“Fool” (III. ii. 285), “Signior Love” (II, ii, 292) と呼ばれているのを聞き、オーランドーが恋に陥っていることを確認した後でも、また、少し後で父に会って無事

を確かめた後でも、ロザリンドは、上着やズボンを脱ごうとはしない。彼女は普遍的な愛を改めて自分で探し出すまでは変装を解かないのである。

アーデンの森には、確かにコリンのような親切な羊飼いの老人がいるし、また、ロザリンドの父である前公爵も次のような台詞を述べ、このアーデンの森という牧歌世界に満足している。

And this our life, exempt from public haunt,
Finds tongues in trees, books in the running brooks,
Sermons in stones, and good in every thing. (II. i. 15-7)

また、お供のアミアンズは、この森に来て小鳥と一緒に歌を歌わないかという唄を口ずさみ、森の中に小規模ながら心地よい空間を創っている。

このような心地よい空間がアーデンの森に存在するのに、ロザリンドはこの空間に満足しない。オーランドーの書いた恋の歌にみられるペトラルカ風恋愛、また、羊飼いいシルヴィアスとつれない恋人フィービーたちまでが演じている宮廷風恋愛、これらに満足できず、ロザリンドことガニミードは、男性の服という斑服を使って、宮廷風恋愛の実体を知り、より良い愛を求めようとする。

理想的な愛を求める道化としてロザリンドは、まず最初に、時計のないアーデンの森に恋人たちの時間意識を持ち込む。それは恋する者が相手を本当に愛そうとする時に生じる時間である。心の中に生じる時のリズムを恋人たちは一致させようと努力する⁶⁾そして、彼らは試行錯誤を繰り返しながら、それぞれの内なる時を完全に一致させることによって、時の過ぎゆくのが感じられないような空間を創っていく。

勿論、恋人たちの時が一致するのは容易なことではない。そこで、謎かけの質問をしながら人々を幻想から呼び醒し、真実を悟らせるという道化の方法を用いながら、ロザリンドは内部の真実の時を見つけようとしている。

彼女はオーランドーに何気無く、時間を尋ね、時間と恋人たちに話題を向ける。

Ros. I pray you, what is't a' clock?

Orl. You should ask me what time o' day; there's no clock in the forest.

Ros. Then there is no true lover in the forest, else sighing every minute and groaning every hour would detect the lazy foot of Time as well as a clock. (III. ii. 299-305)

彼女は、オーランドーが本当に自分に恋をしているのかを知るために、時に関する質問をし、更に後で、オーランドーが時間を守らず約束を破ったことで、腹を立ておろおろする。

シェイクスピアは、ロザリンドに恋人たちの時間を強調させることによって、牧歌空間の際立った特徴である“timeless”⁷⁾という性質を、今からロザリンドが創り上げようとしている愛の空間世界にも付与しようとしているのだと考えられる。

時間に関して言えば、シェイクスピアは、タッチストーンとジェイクウィーズにも時間について語らせ、ロザリンドの時間意識を相対化することを忘れない。タッチストーンは、実りの後は、人間は時とともに衰え、死んでゆくという悲しい現実の時の厳しさについて、自我を持たない道化として独り言を言う。彼の独り言を聞いて、タッチストーンのことが気に入ってしまったジェイクウィーズもまた、以下のような有名な台詞を語っている。

Last scene of all,

That ends this strange eventful history,

Is second childishness, and mere oblivion,

Sans teeth, sans eyes, sans every thing. (II. vii. 163-6)

憂鬱に取り付かれて、自分の世界から出ることができないジェイクウィーズの言葉には、冷笑家の気取りが感じられるが、やはり、タッチストーンと同じように、時が移りゆくとともに、人は滅び、無と化すと考えている。それ故に、恋人たちの溜息も彼らが作る“a woeful ballad” (II. vii. 148) も、彼にとっては空しいものにすぎない。

確かに、人間が時とともに滅びゆく運命にあるということは真実である。だが、それが真実であればあるほど、ロザリンドの前向きの姿は一層魅力的なものに思われる。

生き生きとしたロザリンドが目指す“timeless”な恋人たちの空間は、恋という“madness” (III. ii. 400) を恋人同士が治し合おうとすることによって生じてくる空間である。これは、ロザリンドとオーランドーが中心になって創られるが、そのために重要な役割を果す人物を、アーデンの森という、出会いの森⁸⁾は、ロザリンドにもたらしめていると考えられる。その人物とは、シルヴィアスとフィービーという羊飼いの恋人たち、そしてジェイキーズである。

“meddler”として羊飼いの恋人たちにお節介をやくロザリンドは、宮廷風恋愛のものまねをしてはいるが、中味の伴わないシルヴィアスとフィービーに、それぞれ、まず自分を大切に相手をも尊重すること⁹⁾そして、恋する女の切ない思いを教える。

この時、ロザリンドが用いるのは、第五幕の四場で、タッチストーンが説明している方法である。その方法とは、相手のことを否定的に言うことで、相手を“the Lie Circum / stantial” (V. iv. 85-6)「間接的虚言」から、“the Lie Direct” (V. iv. 86)「直接的虚言」に向かわせて、真実に近づけさせるものである。この方法で、ロザリンドは、シルヴィアスとフィービーの恋の方向を意外な方向へ向けただけでなく、自らも恋人たちの相互尊重の重要性について学んだことになっている。

ロザリンドの恋に役立つもう一人の人物は、先ほど述べたように、ジェイキーズである。ジェイキーズは、ロザリンドに、自分の憂鬱の性質について次のように説明する。

It is a melancholy of mine own, compounded of many simples, extracted from many objects, and indeed the sundry contemplation of my travels, in which [my] often rumination wraps me in a most humorous sadness. (IV. i. 15-20)

ジェイクィーズの憂鬱は、このように、さまざまな成分から出来ている。以前、歌を口ずさむアミアンズに向かって、いたちが卵を吸うように、歌から憂鬱を吸い取ってやろうと彼が話しかける場面でも暗示されていたように、彼はロザリンドの恋によって生じる憂鬱をも吸い込み、彼の独特な憂鬱の一成分にしている。そして、結果的には、彼はロザリンドが創り出そうとする恋人たちの世界から憂鬱を取り除く役割を担っているのである。

充実した恋人たちの世界は、このような人たちに支えられながら出来上がってゆくわけであるが、もう一度、ロザリンドとオーランドーの遣り取りに目を向けてみなければならない。ロザリンドとオーランドーの場合、ロザリンドが主導権を握る。彼女は、一応男性と思われている自分のことを仮にロザリンドだと思って口説くのなら、恋の病いを治してあげられるとオーランドーに語りかける。これに対して、彼はこの恋の病いだけは治して欲しくないと言いはするもの、彼女の話をしていきたいので、この口説きゲームに参加する。

このゲームで、ロザリンドは笑われる道化を演じてしまうことになる。そもそも、このゲームはオーランドーの恋の実体を探るためのものである。だが、以前述べたように、恋の“madness”という空白な精神状態にあるガニミードが、ロザリンド及び女性一般に放つ諷刺の矢は、結局、ガニミードことロザリンド自身に戻ってくる。自分が放った諷刺の矢に自分が当って笑いの渦を巻きおこす喜劇の道化として、人々を笑わせながら、彼女は自ら虚の変装の下にある、理想的なロマンスの主人公としての実体を浮かび上がらせる。

例えば、ガニミードに、“Well, in her person, I say I will not have/you.” (IV. i. 91-2) とからかわれて、真面目に “Then in mine own person, I die.” (IV. i. 93) とオーランドーが答える場面がある。恋人に嫌われたら死んでしまうだろうと言うオーランドーの答えを聞き、驚いて思わず、ロザリンドは “No, faith, die by attorney.” (IV. i. 94) と忠告する。そして、彼を説得するために、ヒーローとリアンダーの話を持ち出し、リアンダー

は、ヒーロウのためでなく、たまたま、足に痙攣を起こして溺死しただけだと力説する。しかし、どんなことを言われても、オーランドーはロマンスの主人公としての態度を崩すことはない。

模範的なロマンスの主人公のオーランドーに、二時間ほど出かけてくると言われて、とうとうロザリンドは “tis but one cast away, and so/come death!” (IV. i. 185-6) と呟き、自分が笑いの対象にしたロマンスの主人公にこそふさわしい台詞を語ってしまうことになる。更に、彼女はシーリアに、こっそり胸のうちを打ち明ける。

O coz, coz, coz, my pretty little coz, that
thou didst know how many fathom deep I am
in love! But it cannot be sounded; my affection
hath an unknown bottom, like the bay of Portugal. (IV. i. 205-8)

彼女は、自分自身で “Like the bay of Portugal” などという誇張表現を使い、もはや、シーリアが立ち入ることができない恋する者の閉ざされた世界の住人となる。

恋する者だけが経験する世界に閉じこもり、溜息ばかりついているロザリンドに、喜劇の結末、結婚へ向かって、行動を起こさせ、更にこの森で四組の恋人たちのより広い祝福の空間を完成させるために手助けする人物として、オリバー、タッチストーン、そして、ハイメンが挙げられる。

兄オリバーをライオンから救い、傷を負ったオーランドーの血染めのハンカチをオリバーに手渡され、気絶してしまうロザリンドに、オリバーは、はっきりと、 “Well then, take a good heart and counterfeit/to be a man.” (IV. iii. 173-4) と言って変装を見破ってしまう。後から森に、やって来たオリバーに変装を見破られたことによって、ロザリンドは今までほど自由に振舞えなくなる。また、アリーナことシーリアとオリバーが、オーランドーも驚くほどの一目惚れをして、結婚式を明日挙げると言い出すことによって、ロザリンドの創り上げようとしていた恋する者の私的な

世界に、現実の出来事がなんの遠慮もなく侵入してくる。

このように改心したオリバーの登場によって、閉鎖的になりかけていた恋する者の空間は、他の恋人たちの正式な結婚という出来事によって、結婚に向かって開放される。

オリバーよりも早く結婚に向かって行動していたのが、タッチストーンである。彼は、宮廷にいた時も恋をしたことがあり、恋の愚かしさをよく知っていたはずなのに、ウィリアムを脅してまで、田舎娘オードリーと道化史上初の結婚を遂げようとする。無論、この結婚については、タッチストーン自身、牧師抜きの方が好都合だと語り、ジェイクィーズも、二ヵ月ももたないだろうと予告しているのであるけれども。

道化タッチストンの結婚には二つの意義があると考えられる。無知ではあるが、素朴な森の娘との結婚は、一つにはアーデンの森と宮廷との結婚を意味し、もう一つには、本来なら恋人たちの世界に付きまとう本能的欲情の部分を彼らが森の中に留まることによって、取り去ってくれることを意味する。

だが、こうして劇が結婚へと進むのを妨げる障害が一つある。それは、ガニミドを女性と知らずに一途に恋してしまったフィービーの存在である。フィービーの一途さは、ロザリンドが本当に宙ぶらりんの道化になって、「虚の空間」¹⁰⁾をさ迷うのではないだろうかと危惧させるほどのものである。しかし、ロザリンドは、タッチストーンが困った時に使う“If” (V. iv. 102), “the only/peacemaker” (V. iv. 102-3) を用いて、この危機から逃れようとする。

このような“confusion” (V. iv. 125) を解くのを手伝い、晴れやかな婚礼を執り行うのが、先ほど触れたようにハイメンの神である。ハイメンは、まず、変装を解いたロザリンドに祝福を与え、改めて彼女を前公爵とオーランドーに引き合わせる。一時的ではあったものの、道化となって、母性的な愛、そして、自分を大切に、恋人をも大切にしようとする愛、更に友愛がどのようなものであるかを見極めたロザリンド、そして、“I can live

no longer by thinking.” (V. ii. 50) と本心を吐き “timeless” な祝福の空間を心から望むオーランドーに、ハイメンから祝福が与えられる。ハイメンは、更に八人の恋人たちの手をしっかりと結びあわせて、ロザリンドの目指していた祝福に満ちあふれた空間の完成を祝う。

“God of every town” (V. iv. 146) と強調されているハイメンは、アーデンの森へ現われ、また一方、フレデリック公爵がこの森の外れで老僧に会い旅に出るという知らせがもたらされる。もはや、宮廷とアーデンの森の境界線は必要ないのである。

理想的な愛を求めて道化となったロザリンドは、アーデンの森に婚礼の歌の響く広々とした愛の空間を創り上げたと言える。

Wedding is great Juno's crown,
O blessed bond of board and bed!
'Tis Hymen peoples every town,
High wedlock then be honored. (V. iv. 141-4)

既に、ここには運命のおかみさんの姿はなく、ロザリンドたちの愛による宮廷帰還によって、宮廷にも愛の空間が広がることが予想される。愛の持つ魔力は、ジェイキーズ、フレデリックを森の周辺へ押しやって旅に出させ、道化まで結婚させてしまうのである。

確かにアーデンの森は、“There they find refuge, gain strength, learn—and return.”¹¹⁾のための場所であるが、シェイクスピアは、ロザリンドを道化的人物として描くことによって、アーデンの森で、新しい、愛の理想的な空間を創り出すことに成功し、宮廷への帰還を、はっきりと愛による帰還として描き出していると言える。

注

- 1) 安西徹雄「シェイクスピアの女性像」『ルネッサンス双書13・英国ルネッサンス文学の女性像』（荒竹出版、1982）、p. 44 参照。
- 2) 引用の行数表示は、すべて、*The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974) 版に拠る。

- 3) David Young, *The Heart's Forest: A Study of Shakespeare's Pastoral Plays* (New Haven and London: Yale University Press, 1972), p. 62.
- 4) 藤田実「普遍と土着—『お気に召すまま』小論—」, 『山川鴻三教授退官記念論文集』(英宝社, 1981), p. 94 参照。
- 5) 時代背景と変装の意味については, 青山誠子『シェイクスピアの女たち』(研究社, 1981), p. 28 参照。
- 6) 福永武彦『愛の試み』(新潮文庫, 1975) p. 45 参照。
- 7) Jay. L. Halio, "Time in *As You Like It*," *Studies in English Literature 1500-1900*, Vol. II, Spring 1962, p. 200.
- 8) Harold Jenkins, "As You Like It," *Shakespeare Survey*, 8 (Cambridge: Cambridge University Press, 1955), p. 50 参照。
- 9) D. A. Traversi, *An Approach To Shakespeare*, Vol. I (Garden City: Doubleday & Company, Inc., 1969), p. 317.
- 10) 高橋康也『道化の文学』(中公新書, 1977), p. 131.
- 11) Halio, p. 207.